

69 明治9年8月6日 菊池長閑宛

第八号 八月六日

(長閑注記1) 第七号七月初旬出したりと覚る
故此度へ八号とす未慥ならず

(長閑注記2)

第六号拜見御祖母様七拾七の御祝被成たる由愛度し阿すみさんの文章ハ実（まこと）に驚入（おどろ）たり書振も章も結好（むす）たが考ハ猶又秀なり兄の悦之（よろこ）に不過何卒此後も出精被成たし針仕事や其他手業ハ年増て後に出来るもの故必其様な物に骨を不折と心を磨へし昔とハ違ひ座敷の掃除や飯の焚方ハ上手ても今の世てハ好娘ても云れず結好（むす）な奥とも申されぬから誰か何と云ふても先々学問出精有たし女ハ男の様に学問か出来ぬと思ひ昔の僻事にて此国の学校にハ女の男に勝れる事更に珍らしからぬものなり水晶のボタンを送被下杯云と私の榮耀の様に思ふ人有かの風聞もあり知ぬ人の考にハ尤故先便態々尊前迄御断り申たる所不図一條治士より私に呉ると云て送られ信切誠に忝なく甚気の毒に存する故早速礼

状ハ出したれ共御序に宜敷御申伝被下たし実ハ当り前学校の外
に私教師を取稽古致し同人に女の持様な赤い扇も不被遣幸博覧
会に日本物有故非常に高直と知ツ、象牙のボタンを買求たる跡
なれば早速用に達す共必入用の時有故其時ハ御蔭にて無汰(なげ)の費
用を省へしと考居なり博覧会见物の様子ハ後便に譲る

御尊父様

武夫拜

至机下

(長閑注記1)

(朱書)
「此七号未達」

(長閑注記2)

(朱書)
「十月四日達日数六十日也」